瀬戸遺跡発掘調査報告書

1974年３月31日

鏡野町教育委員会

例　言

1．この調査は鏡野町教育委員会が，岡山県の依頼を受け調査を行なったものである。

2．挿図中の５万分の１の地形図は国土地理院の承認を得て掲載したものである。

3．発掘調査及び報告書は，下沢公明がおこなった。

序

大規模農道布設にともなう，瀬戸遺跡発掘調査報告書が発刊される運びとなりました。

昭和49年３月，発掘調査に着手してから半月，きわめて短期間に発掘と調査・研究が完了できたのでありますから，たいへん御苦労なことだったと存じます。貴重な報告書が発刊でき，歴史を解明する上からも，文化財保護行政の見地からも，たいへん喜ばしく思います。

ここに，この調査にあたって，終始御理解と御協力をいただいた県当局，関係各機関の方がた，御指導を賜わった研究者各位，ならびに直接この調査を担当してくださった皆さまに，厚くお礼を申しあげます。

昭和49年３月

鏡野町教育委員会教育長

宗　本　治

苫田郡鏡野町瀬戸遺跡発掘調査報告

序

Ⅰ　経　過 …… 1

Ⅱ　調査概要 …… 2

Ⅲ　結　び …… 3

図版目次

Ⅰ

1．北西より遺跡を望む…… 5

2．竪穴式住居跡

挿図目次

第１図　位置図…… 2

第２図　瀬戸遺跡地形図… 3

第３図　住居跡実測図($\frac{1}{4}$) 4

第４図　遺物実測図…… 4

瀬戸遺跡の調査

I 経　過

広域営農用地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は，国道１７９号線より東に位置する竹田遺跡については鏡野町竹田遺跡調査委員会により発掘調査が続けられている。

当初の路線で町指定史跡瀬戸大塚が用地内に入るために，路線を南に変更することにより瀬戸大塚をはずすことになった。さらに瀬戸大塚の前面に南北に延びる舌状の丘陵があり，その南側部分に台状墓と推定される遺跡があるので再度路線を北にずらすことにより保存の処置がなされた。しかしながら，台状墓と同一平面上に続いている丘陵には，それに関連する遺構の存在が推定されるために，津山農林事務所と協議をし，発掘調査を実施することになった。

調査は昭和４９年３月１日～３月１５日までである。

II 調査概要

南―北４６・２０ｍ，東―５，５０ｍ，西６，００ｍのグリットを２２カ所設け調査を開始する。各グリットとも表土層のみの堆積がみられるだけで，直接第３紀層の面に達する。

出土遺跡はＡ―11で，再堆積と考えられる軟弱な黄褐色土層中に，スリ石を１点検出する。

上記のグリットによる調査において，遺物を含んでいる層，さらには遺構も確認されることがなかった。しかしながら再確認のために，南―北に幅６０cmのトレンチを入れた結果，Ａ―１，２，Ｂ―１，２にかかって竪穴式住居跡を確認する。なおこのトレンチは11まで延長したが，遺構，遺物の出土はみられなかった。

以下遺構，遺物について述べる。

竪穴式住居跡

形態―円形，規模―３１５cm，柱穴はＰ１―21cm×21cm，深さ35cm，Ｐ２―17cm×13cm，深さ35cm，Ｐ３―21cm×15cm，深さ24cm，Ｐ４―17cm×16cm，深さ24cmを測る。中央穴は方形のプランを示し，二段状に掘り込まれている。規模は34cm×32cmで，深さ27cmをそれぞれ測る。

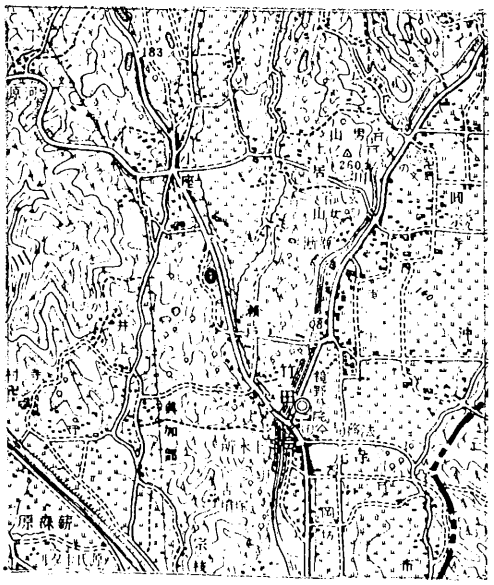
壁帯溝は西壁で50cmに渡って切れる他は，全周している。

出土遺物は，埋土中より壺形土器の破片，管玉，石庖丁などであり，床面直上よりの出土はみられなかった。

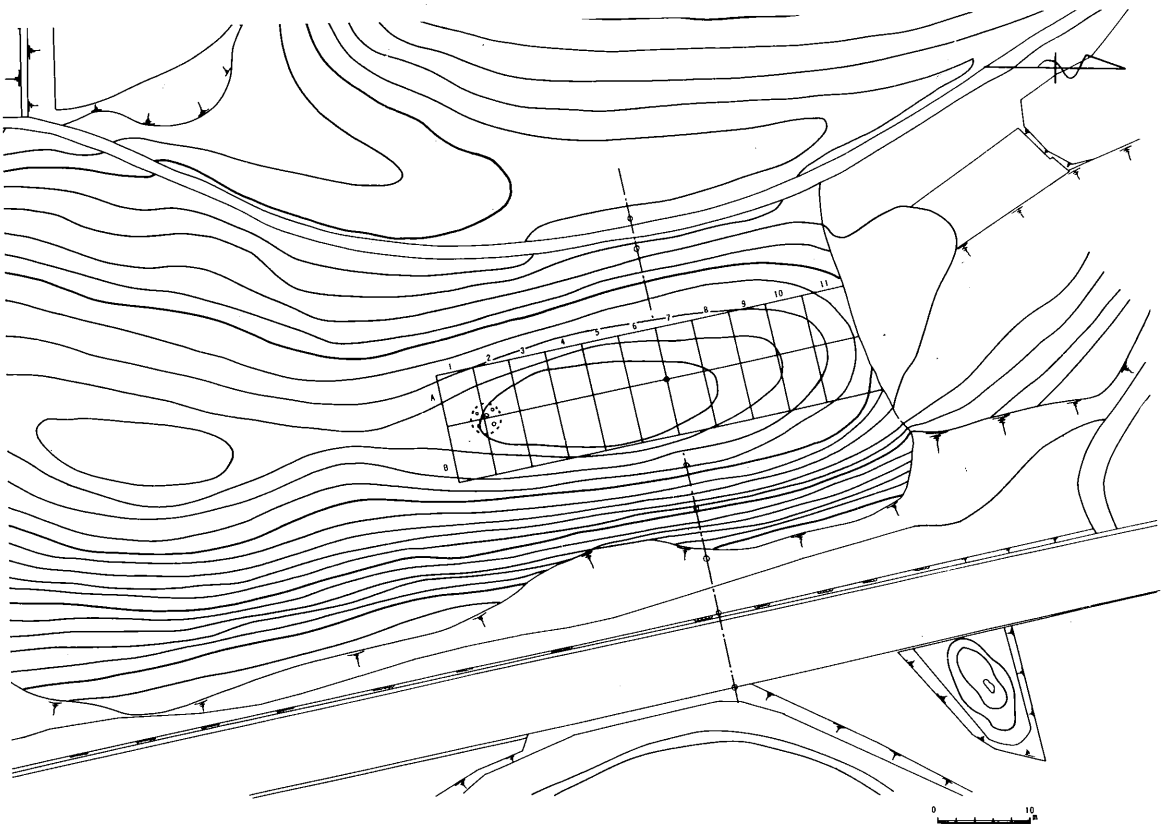
壺形土器は複合口縁状をなし，口縁端部に細い凹線が４本施文されている破片の他は無文である。

石庖丁は変岩系の石材で造られており，表面に陰刻を施こしている。

管玉は，　長さ1，5cm，幅５mmで，穿孔は両側よりなされている。



第Ｉ図　位　置　図



第2図　瀬戸遺跡地形図

III 結　　び

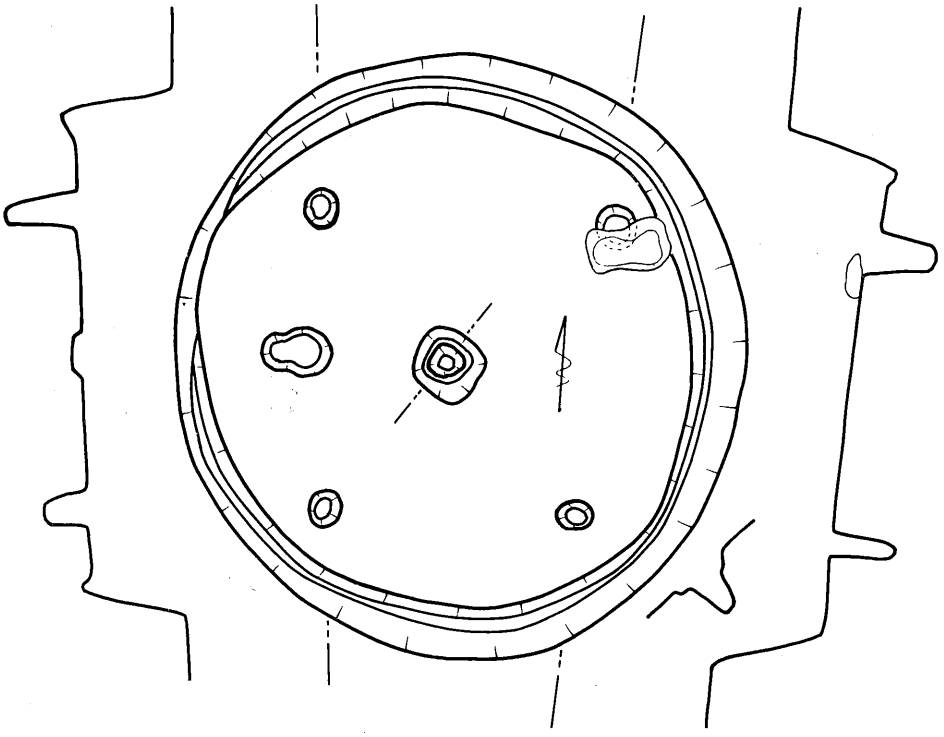
南―北にのびる丘陵上の南側部分には，丘陵面を平坦に削平して，盛土を造っている古墳が1基存在している。この関連で，北側部分には土坑墓が位置すると推定されていた。しかしながら今回検出された遺構は，竪穴式住居跡1基であった。

丘陵平坦部の幅は8m前後で，細長いために生活の場としては，その背景がほとんどない地点である。従って住居跡の存在などは全く予想していなかった。又，遺物の散布状態からもこれ以外に遺構が存在したという内容を示していない。弥生時代後期の集落形態及び立地からすれば，このような地点に住居が単一に営なまれること自体が特異なものとして考えられる。

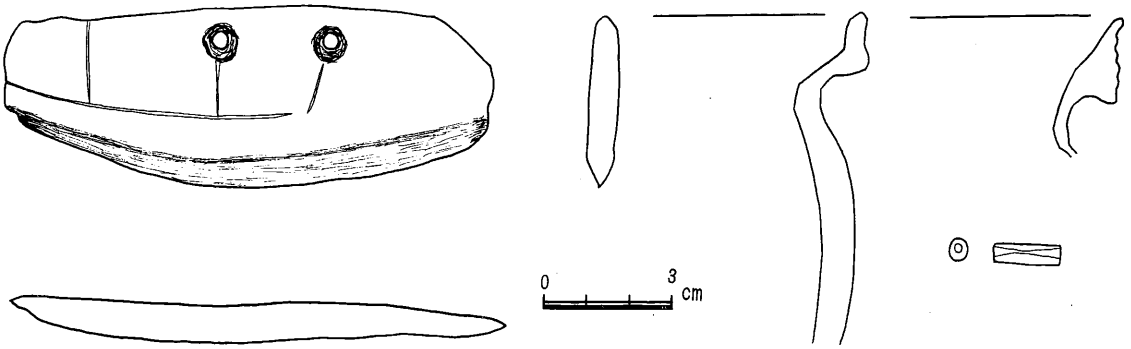
さらに述べるならば，住居跡のプランの確認面（住居内堆積土の最上層）より管玉1個を検出したことは，その出土状態からすれば，土坑墓における玉類の副葬の状態と同じような様相を示している。又，この時期において住居址の方形化への形態の推移は福市遺跡（註1）により詳しく述べられている如く，このような規模の小さい円形の形態を存することはない。いずれも柱の大きさよりも大きく掘り方をとらず，柱そのものの大きさのようである。

以上述べてきたことからするならば，この住居址は，居住の場としてではなく，何か特定の目的を持ってこの地点に構築された竪穴と考えられるのである。

註1「福市遺跡の研究」山陰考古学研究所　1969年

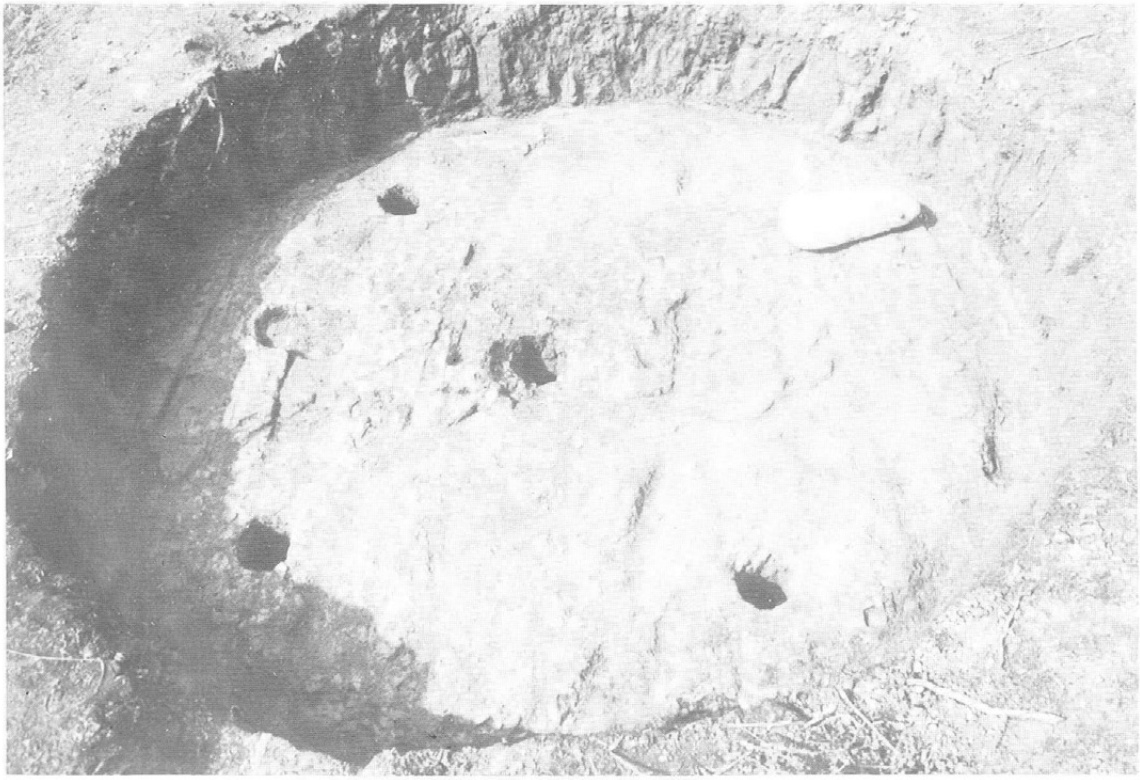


第３図　住居跡実測図　$\frac{1}{4}$



第４図　遺物実測図

1．北面より遺跡を望む



2 竪 穴 式 住 居 跡

瀬戸遺跡発掘調査報告

１９７４年３月３１日

発行　鏡野町教育委員会
苫田郡鏡野町竹田

印刷 株式会社 作 州 日 報 社